

釉下彩鷺図皿

吹付の技法による、緑色のグラデーションが美しい皿。鷺の図柄は多く描かれたようです
多治見市美濃焼ミュージアム所蔵



巻頭特集

多治見で生まれ、世界へ羽ばたいた

西浦焼の

魅力

明治時代、多治見で製造されていた

「西浦焼」をご存知でしょうか。

ヨーロッパ・アメリカに輸出され世界的な

評価を得ましたが、国内に残る数が少なく、

幻とも呼ばれた焼物です。



釉下彩鷺文碗皿

脚付きのカップが印象的。茶菓子に乗せてティータイムを楽しめるモダンな形
多治見市美濃焼ミュージアム所蔵



釉下彩紫陽花図花瓶

西浦焼を代表する製品。繊細な吹絵の技法とグラデーションが美しく、匠の技が光ります
多治見市美濃焼ミュージアム所蔵

釉下彩富士山図皿

富士山に鷺が描かれた日本的な図柄。欧米への輸出用に好まれたことが推測されます
多治見市美濃焼ミュージアム所蔵



美濃焼を世界へ万国博覧会に出品

明治時代初めから明治44年にかけて、土岐郡多治見町（現多治見市）でつくられていた西浦焼。その生みの親は、多治見の豪商であった三代目西浦圓治（1806〜1884）と五代目西浦圓治（1856〜1914）です。1853年、ペリーの浦賀来航により日本は開国へと進みます。時代は江戸から明治へと移り、政治・経済・文化の分野においても大改革が行われました。

美濃では文化元年頃から新製（磁器）がつくられるようになり、文政頃には高い完成度を誇っていました。すでに陶磁器産業の主要生産地となっていました。明治5年に窯株制度（窯株を持つことにより製造の権利が与えられると同時に、その身分が保護される制度）が廃止されたことにより、さらに自由に生産や販売ができるようになりました。



上) 安政3年、岐阜県岩村町に生まれた五代目西浦圓治。明治の新風を受け、当時まだ珍しいフロックコートを身にまとうなど、ハイカラな人物だったといわれます。下) 西浦焼は、「西浦」のほか「日本美濃西浦製造」、「西浦組職工加藤五輔造」、「西浦造」などの銘を入れて輸出されました

一方で優れた製陶家に図案を渡した三代目西浦圓治。染付や上絵付製品を製造させ、国内外に販売しました。これが西浦焼の始まりです。なかでも多治見町市之倉村の名工、加藤五輔には多くを発注し、共に名作を生み出しました。明治18年頃になると、西浦家は自家でも焼物を製造するようになり、製造から販売まで事業を拡大します。

西浦焼は、五代目西浦圓治の代に最盛期を迎えます。明治22（1889）年には、パリ万国博覧会に製品を出品し銅賞を、明治37（1904）年のアメリカ・セントルイス万国博覧会にて金賞を受賞するなど、その技術は世界に認められます。鑑識眼や油絵の素養があり、多治見町長や美濃陶磁器同業組合長にも就任した五代目西浦圓治でした。良品をつくるためには家財を借しむことなくつぎ込みましたが、明治44（1911）年に工場を閉鎖。そして、西浦焼製造の歴史は幕を閉じます。

プロの技が結集 緻密で優美な製品群

19世紀末から20世紀初頭、世界的にアール・ヌーボーが大流行。花や植物などの有機的なモチーフや従来の様式にとらわれない装飾、当時の新素材の利用などが芸術の主流となりました。

日本の美術や工芸は海外の作家に影響を与え、また海外からも多くの作風がとどきました。これらを時代背景として、従来の美濃焼にない繊細さや優美さを持つ、西浦焼が誕生したのです。

たことで、一時代を築いたのだといえるでしょう。

繊細な技と先人の気概を感じ 西浦焼鑑賞を楽しむ

現在、西浦焼が常設展示されているのは、多治見市内では「多治見市美濃焼ミュージアム」のみです。間近で見ると西浦焼は、今見ても新しさを感ずる、想像以上に細かく丁寧な職人技に驚かされます。収蔵されている約30点のうち、数点を入れ替えながら展示するので、さまざまな種類の作品を見ることが出来ます。

陶器師で西浦焼の研究をしている高木典利さんは、「何度見ても感動し、感心します」と西浦焼の魅力を語りま

す。鑑賞の際は、「感じるままに見るのが一番」としながらも、「歴史背景に思いを馳せながら眺めるのもいいでしょうね」とアドバイス。「海外の国立製陶所の製品に匹敵する焼物を、個人で生み出した西浦圓治はすごい人物。開国して間もない時代、コーヒーの味を知る前にコーヒーカップをつくり、装飾した職人たちの意識の高さにも心打たれます」と話します。

明治時代、美濃焼の技術をもって日本の文化を高め、海外と対等に渡り合おうと考えた多治見の先人たちの気概を、ぜひ感じてみましょう。



平正窯五代目の陶器師、高木典利氏。作陶の傍ら西浦焼を研究し、著書「西浦焼」を発表。西浦焼の復元にも挑み、その難度を実感したそうです

される理由の一つとなりました。吹絵とは、細かな模様を周りに一枚ずつ和紙でマスキングをして、絵具を噴霧状にして吹き付ける技法。小さな花びらや葉の一枚一枚まで、吹絵でグラデーションを付けながら表現することができます。盛上げは、白泥で模様を立体的に盛る技法で、ヨーロッパの磁器にも見られます。それらを彫刻などの装飾と組み合わせることで、西浦焼は美術品として高い評価を得ることとなります。生地を成形して焼く、絵付をする、釉薬をかけるといった、全ての工程のプロフェッショナルが集結し



多治見市美濃焼ミュージアム
多治見市東町1-9-27
0572-23-1191
9:00〜17:00(入館は16:30まで)
月曜休(祝日の場合は開館、翌日休館)
観覧料 一般300円、大学生200円、
高校生以下は無料
http://www.tajimi-bunka.or.jp/minoyaki_museum